

# 広島大学学術情報リポジトリ

## Hiroshima University Institutional Repository

Title	美しさの認識を更新することで〈他者〉を楽しみ続ける子どもを育てる：カリキュラムの連動を磨き、学校の教育力を高める～抽象に着眼して～
Author(s)	造形科研究部,
Citation	研究紀要 / 広島大学附属小学校, 52 : 103 - 104
Issue Date	2024-07-30
DOI	
Self DOI	<a href="https://doi.org/10.15027/55619">10.15027/55619</a>
URL	<a href="https://doi.org/10.15027/55619">https://doi.org/10.15027/55619</a>
Right	
Relation	



# 美しさの認識を更新することで〈他者〉を楽しみ続ける子どもを育てる —カリキュラムの連動を磨き、学校の教育力を高める— ～抽象に着眼して～

造形科研究部

## 1 芸術教育における〈他者〉と連動性

芸術教育の価値とは、作品の出来栄でもなければ、高度な技能習得でもない。想像的かつ創造的な美的経験を通して自分や他者と向き合う中で、自分自身を発見しながら自己を形成し、自分や自分以外の人や物ごとについて認識を更新し続けることにある。本研究では、造形科授業による芸術教育のその先に、「日常の中にある人や自然の美しさやよさを見つけ、大事にしようとする（心が育った）姿」を設定している。自分にとっての外部に、未知であり異質である〈他者〉を発見したときに、新たな価値を見出し、新しく受け入れたり、楽しんだり、好きになったりすることは、人生を豊かにすることにつながるだろう。これらを実現するために、授業開発及びカリキュラム構想に取り組んできた。また、価値形成に大きく関わる造形科の本質は、どの教科とも連動性が高いと言える。特にこれまでに、音楽、国語、英語、理科、生活、道徳、学校行事との連動に具体性を見出してきた。さらに、本年度は「抽象」に着眼し、教科内のカリキュラム連動に取り組んだ。

## 2 美しさの認識を更新すること

「日常にある美しいものとは」と聞かれ、人は何を思い浮かべるか。きれいなもの、整ったもの、カラフルなものもあれば、個人的経験や思い出、思い入れが含まれたものもあるだろう。そこに、不自然で、無秩序で、歪なものはあるだろうか。

例えば、植物のアジサイは、鮮やかな開花期が終わると選定するのが通説だったが、最近では、花色が退色変化する様子を美しいと感じる価値観が広まり、「秋色アジサイ」、「アンティークアジサイ」などと呼ばれ人気が出ている。「見栄え悪い」とされてきたことの中に、よさや美しさを見つけたことは、美の認識が変容した例だと言える。他にも近年では、髪質や肌色などについて、人類の歴史でつくられてきた美の認識に対し、価値変動が起きつつある。皆が当たり前だと思っていたことが揺らぐことには、不安や恐れが生じるものだが、優れた芸術家はいつも、その真実にたどり着こうと絵を描いたりものをつくったりしてきたのではないだろうか。

造形科の授業では、1回でガラリと価値観が変容することを目指すのではなく、いくつもの色や形に関する感覚を通じた経験によって、さまざまなものの見方や感じ方が

柔らかく、豊かになっていくことを目指している。

### 3 授業づくりについて

昨年までに、本研究の目的を達成するための授業づくりにおける視点を次の4つに整理してきた。今年度もこれらに基づいて授業開発を行った。

- (1) 新しい価値や感性との出会い
- (2) 選択と失敗ができる
- (3) 自分にとっての意味や価値を見つける
- (4) 自己受容・他者尊重, 自己更新がある ~メタ認知を働かせて~

### 4 抽象への着眼

抽象という言葉が持つイメージは、現在マイナスなものが多く、「具体的でわかりやすい」ことがよしとされる風潮もある。しかし、いつも明瞭ではっきりしていることだけがよいとも言いきれないし、曖昧さや混沌とした中に真実があることもある。芸術で表現する心象や感覚は、具体的で分かりやすいことの対極にあることも多く、それに対する芸術の包容力は大きい。そこで、よく分からない〈他者〉に対する認識を更新するためには、抽象という不確実で曖昧なものとの出会いや受容を経験することが一つの方法になると考えた。

本校造形科における**抽象的な表現**について、次のように特徴を整理した。

- 目に見える既存の色・形とは必ずしも一致しない。むしろ、印象や経験によって自由に解釈されるもの。
- 何かはっきりと説明できない、イメージを表したもの
- 色や形、素材の特徴から即興的に始まり、後から意味づいていくもの。
- 他者および自分にとって、多様な見え方やとらえ方ができるもの。

このような抽象的な表現は、物事や経験が自分にとってどのような価値があるかを捉え直したり、表現の再現性や類似性に縛られず、自由に発想したりすることで実現する。また、現時点で各学年における抽象を意識した単元、題材は次の通りである。

第1学年	「いろいろならべて」、「チョッキンパツでかざろう」「わたしのたいよう」
第2学年	「思い出の形」「ビンの中のたからもの」
第3学年	「にじんで広がる色の世界」
第4学年	「絵の具のぼうけん～自分色紙でお話づくり」
第5学年	「ことばと思いを色と形に」、「墨のうた」
第6学年	「はさみで絵をかくように」「詩と版画」

(文責 芦田 桃子)